五百旗頭真の

大災害の時代

第42回 ［リスボンの教訓］

復興を導く高い指導力

3年半を超える連載となったこの「大災害の時代」では、近代日本の三つの大震災を比較検討してきた。関連する大災害として、明暦の江戸大火や、明治と昭和の三陸津波なども視界に入れて論じてきた。しかし日本国内の災害ばかりでいいのだろうか。

日本ほど人口稠密な社会中枢部が大災害に襲われる国は稀なので、いきおい日本の例が中心となるが、もちろん諸外国にも大災害はある。とりわけ1755年のリスボン地震は、かつて栄華を誇った世界帝国ポルトガルの首都が大地震と津波、そして火災によって壊滅した悲劇として人類史に刻印を残している。西洋史において幾重にも巨大な意味を持った震災であったが、東日本大震災後に日本でもリスボン地震への言及がめだつようになった。大地震を機として衰退に向かったという両国の宿命的境遇の共通性を意識した故であろうか。

であるとすれば、それは誤解にもとづく興味であると言わねばならない。リスボン地震の危機管理も応急対応も、そして20年に及ぶ復興についても、歴史的モデルと言ってよいほどの見事なものだった。旧とは見違えるほど立派な首都を創造したのである。リスボンは災い転じて福となす創造的復興に成功した。が、その後、19世紀に入ってのナポレオン戦争で腰を折られ、長期的にオランダや英国など北方の新産業国に太刀打ちできなくなった。地震によって衰退したわけではないが、立派な復興も長期的すう勢を覆すことはできなかったのである。

今年はリスボン地震から260年、阪神・淡路大震災20年である。共同で国際シンポジウムを開催することになり、河田惠昭・関西大教授とともに私はリスボン市を訪れた。11月1日の記念式典、2、3日のシンポとワークショップの間に、市内の遺構や博物館を訪ね、260年前の大災害を追体験することができた。リスボン地震とその復興を振り返り、そこから近代日本の大震災を見ておきたい。

ポルトガルの沖合千数百キロの大西洋には南北にプレートの割れ目があり、そこから直角にジブラルタル海峡から地中海を東西に切るプレートの裂け目がある。アフリカ大陸プレートがヨーロッパ大陸プレートの下へ潜り込むのではなく、東西にずれる裂け目である。その大西洋200キロ沖あたりを震源に大きな（マグニチュード8・6か）地震が起こった。その日、11月1日はカトリック国では「諸聖人の祝日」であり、午前9時半、ミサ中に激震となった。今も遺構として残るカルモ教会は天井がなく、信徒たちに降り注いだことが分かる。神に頼むことに益があるかとの人文主義者の批評がヨーロッパに生じた一方、神の罰と強弁するポルトガルのイエズス会の声があった。

3度にわたって10分近く揺れた後、40分後に5～10メートルの津波がテージョ川からリスボンに襲いかかった。火災が続き、首都は6日間燃え続けた。市内の建物の大部分が、地震・津波・火災の複合災害で失われた。

リスボン市内に保存されているカルモ修道院の遺構＝ひょうご震災記念21世紀研究機構提供

一閣僚に全権委任

ジョゼ国王は幸運にもベレン離宮にいて難を逃れたが、打ちひしがれて何もできず、都へ戻ろうともしなかった。後にポンバル侯爵と呼ばれることになる自信に満ちた一閣僚に王は全権を委ねた。これが大成功であった。ポンバルは国際経験が豊かであり、1666年の大火後のロンドンの再建や、ウィーンでの宗教的迷信への対処などを学習していた。彼は馬車で被災地に入り、そのまま現地で陣頭指揮をとった。「死者を葬り、生ける者を助ける」。疫病を避けるため、水葬と称して遺体を軍隊と市民にテージョ川に投げ込ませた。崩壊した地にテントを張って支援所・避難所とし、水・食糧・医療を人々に提供した。火事場泥棒や略奪を行う者を広場で吊し、軍隊を出動させて治安を回復した。また食品や資材の価格を統制した。危機管理も応急対応も、今日から見てもAクラスといえよう。

首相不在で政治決定が遅れ、流言飛語に惑わされて自警団による虐殺を許した関東大震災の危機管理と応急対応は、リスボンに遠く及ばない（DとC）。阪神・淡路大震災では、被災地の兵庫県庁も首相官邸も情報システムを欠き半日間事態を認識できなかった。第一線部隊では、警察と消防も苦闘したが、とりわけ自衛隊は初動に遅れた。阪神・淡路の危機管理と応急対応は失敗の部類であった（CとB）。その点、東日本大震災では、政府も第一線部隊も阪神・淡路の教訓に学んで改革をとげ、地震と津波に対して機敏に対応した（A）。が、原発事故に対する東京電力本店の対応は鈍く、当事者をカバーする準備は政府にも乏しかった（D）。

リスボンの復興は注目に値する。ポンバルは住民がてんでに復旧することを禁じ、技師たちに五つの復興案を作らせた。そのうち壊滅したバイシャ地区を広い街路の碁盤目状の都心に作りかえる第4案を採用した。バイシャ地区の海辺と山側の両端には大きな広場を設け、すばらしい首都となった。この度、シンポジウムの会場は教会を銀行に造りかえたホールであったが、その地下にはヤニを出して水の中でも腐りにくい松の杭が無数に打ち込まれており、その上に木組みをつくって土台を強化していた。ベネチアなどに存在した技術であるが、液状化対策としても立派であり、堅固な地盤まで届かない鉄杭でビルが傾いているどこかの国は学ぶべきではないかと思った。

新しいまちを創造

土台だけでなく統一基準の4階建てビルについても、鳥かご方式という木組みに石積みして、耐震化を図った。今では5階、6階を上乗せしているビルが多いのは気になるが、ポンバルが20年の独裁権を与えられて、当時の技術の粋をつくして全く新しいまちを創造したことは高く評価できよう（AA）。

関東大震災では、後藤新平の新帝都をめざす創造的復興構想は政争の中でついえたかに見えたが、内務省復興局や東京市の手でかなりの都市計画が実施されてその後の発展の礎となった（A）。阪神・淡路大震災の復興では、国費は復旧までであり、旧より良い復興を望むなら地元財源で行えという行政の壁が立てられた。しかし地元は創造的復興にこだわり、防災ミュージアムとシンクタンク、芸術文化センターなど後代の資産となる事業を少なからず実施した（A）。

東日本大震災では、創造的復興が国の方針となり、5年目の今日、三陸海岸の自治体は、決定的に安全なまちを創造すべく大土木工事中である。復興の手厚さは、国民が復興増税を受けいれたお陰であろう。宮城県南三陸町のように、住居はすべて丘の上に高台移転し、平野部に10メートルの人工丘を造り、そこに商店街などを置くまちもある。100年に1度の津波対応を基本としているが、1000年に1度の津波に対しても安全といえるまちづくりだ（AA）。ただ原発事故に伴う汚染地域、創造的復興どころではない。そもそも福島第1原発の1～4号機は廃炉プロセスに入っている。いまだに住民が戻れない地区もある。

ポンバルは耐震性のある安全な首都を再建しただけでなく、産業活性化にも意を用い、地震による衰退にも立ち向かった。最大の植民地であったブラジルに復興税を課して財源とした。また、大地震の実態を掌握するため、広範なアンケート調査を行ったことは、災害への科学的対処の起点として注目に値する。ただ、先端産業をもってヨーロッパをリードしえたのは、北方の英国などであってポルトガルではなかった。

関東大震災は近代日本の躍進期に起こったが、阪神・淡路と東日本の大震災は、日本経済が凋落を迎えた時期に起こった。それだけに東日本大震災の復興は、安全なまちの創造以上に、にぎわいのある魅力的なまちをつくり出せるか否かが中心課題とならざるを得ない。（計盛哲夫「リスボン地震の緊急対応と復旧・復興」、災害対策全書別冊「『国難』となる巨大災害に備える」＝ぎょうせい、2015年＝所収、ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査報告書「リスボン地震とその文明史的意義の考察」15年）

リスボン地震との比較

		リスボン地震	関東大震災	阪神・淡路大震災	東日本大震災	
発生日		1755年11月1日	1923年9月1日	1995年1月17日	2011年3月11日	
死者		6万人以上	10万5000人	6434人	1万5893人、不明2572人、関連死3000人余	
災害の種類		地震・津波・火災	地震・火災	地震	地震・津波	原発事故
対応の評価	危機管理	A	D	C	A	D
	応急対応	A	C	B	A	C
	復旧	―	B	A	―	―
	創造的復興	AA	A	A	AA	―

いおきべ・まこと　ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長、熊本県立大学理事長・日本政治外交史

毎日新聞　2015年11月19日（木）掲載

※この記事は毎日新聞社の承諾を得て掲載しています。